

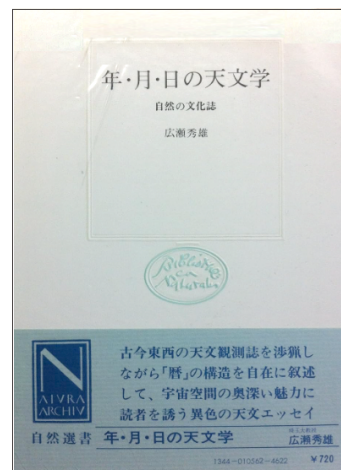
科学は一日にしてならず — 広瀬秀雄『年・月・日の天文学』 —

宇宙の大きさは138億光年、ひも理論による多元宇宙、ブラックホールと重力波。最新天文学（宇宙物理論）は年々変化し、元天体少年には理解し難いものになっている。近くにある火星・木星・土星といったお仲間ですえ最新探査機が行くと、新たな発見で通説が大胆に変わる。そういった最新学説に至る前の暦・星を中心とした天文学史の面白エッセイを紹介したい。（菊地実）

文理両道

広瀬秀雄さんには、関係者の間でよく知られた有名なエピソードがある。戦後間もない1948年、礼文島での日食観測でデータを見直し、海外からの観測班を一キロ移動させ面目を施した。これは本書の「星月に入る」の章に経緯が書かれている。

本書は中央公論科学雑誌『自然』に連載したエッセイ集で「天文学は・・・よく迂遠なもの見本・・・天文学者は地上とは無関係な天界の現象にうつつを抜かし、実



<自然選書>

<図表> 本書の章立て

流星光底の長蛇	ポルトガル日付と スペイン日付
深い穴から天のぞく	初日の出
十目が子	わが衣手は露にぬれつつ
刻白爾と歌白尼	FEBRUARY
ウラニア城と ベルヴェデーレ宮殿	エピローグ
熒惑出れば即ち兵あり	カンタベリー物語
竜頭・竜尾	かささぎの渡せる端
星月に入る	九月は七月である
消えた祝日の銀河祭	天正冬至
角燈を通してみる灯	改暦の沙汰も金次第
いま何時だ？ へい九ツで	あとがき
来年の今月今夜の この月を	

生活や実社会に疎い変わりものと評価されている・・・三十年の天文台生活を終えました今は、世間一般の方々と共に天文学を大いに楽しみたい」（あとがき192-94頁要約）と語っている。

トリビアな知識満載

氏のお名前は『天文ガイド』『理科年表』を通じて、古くから知っていた。後年、元『自然』編集長氏と映像コンクール審査員でご一緒した時にお名前を出したら、たまたま担当者で話が弾んだ。明治人らしく文武両道というより文理両道で、和漢書にも精通している。冒頭

「流星光底の長蛇」は<日蓮と星>とサブタイトルされているように、日蓮聖人の法難から始まる。「いま何時だ、へい九ツで」は古典落語「時そば」から江戸時代の時刻制度を論じている。

どの文章もくだけたエッセイだが、内容は他書にない知識満載である。「来年の今月今夜のこの月を」では旧暦の日付は貞観三年(861年)採用された宣明暦が十七世紀までなんと八百年間も続いた(秋津洲の後進性がよくわかる)。律令制度は「お寒い限りで天文博士・暦博士老衰しても後継者に苦しみ・・・それから千年立った昭和十年台の東京天文台は、東京帝国大学の付属であったが陰陽寮同様の技師・技手制度だった。台長だけが学部の教授で。遍暦主任は助教授・・・技師にも六十才定年が強制的に適用されせいぜい五千円の退職金で大先生が去って行かれた」(106頁)と、トホホな内情を語る。ただし八百年間同じ暦を使っていたので、国史研究には便益があると書いている(コンピューター利用で昔の暦博士の一生分の計算が一時間でできるとも断っている)。さらに最後の章で江戸時代の改暦の経緯をまとめている。

消えた祝日の銀河祭

山本有三(作家・参議院議員)が委員長のコメコンが十月の祝日を銀河祭とする案を東京天文台に問い合わせたことがあった。「親の心子知らずというか・・・七月七日ならいざ知らず、十月と銀河とどんな因縁があるかなどと、つまらぬ議論で、せつかくの有給休暇の

喜びを多数の人から奪った」(77頁)。これが今日の「体育の日」である。できれば、天文ファンとしては七月七日を銀河の日にしてほしかった。

白眉は海外旅行

本書を読むと天文学が暦・時間と密接な関連があることがわかる。日付変更線を扱った「ポルトガル日付とスペイン日付」である。「日本人で日付変更の問題に注目したのは幕末の高橋景保が最初らしい」(125頁)。さらに「今は初歩的な知識に過ぎなくなっているが幕末でも暦学者や体験者に十分理解できなかったことも興味深い」(128頁)。やはり地球が丸く自転している実感がなかったのであろうか？

本書の白眉は世界標準時を作ったグリニッジ天文台(本書内表記ではグリニジ)やフラムスティードの恒星表。さらに1964年のティコ・ブラーエ天文台跡への旅行記で、コペンハーゲン近くやベルヴェデーレ宮殿の記述が圧巻である。ティコ・ブラーエは肉眼最後の大天文学者。緻密な観測から円ではなく楕円という近代天文学の基礎を作った学者が、意外やファウスト博士の如くマジシャン的だったことを示している。

本書はこの二年後に刊行された『望遠鏡』と共に、私の数少ない愛読書である。

本書奥付には、73年5月24日「読了」と日付が書いている。宇宙論も五十年で様変わりしたが、当時の大学生は七十翁になってしまった。

■筆者/ 広瀬秀雄(ひろせ ひでお) 兵庫県姫路市生まれの天文学者(1908-1982年)。1932年東京帝大理学部天文学科卒業。東京大学教授、東京天文台長、埼玉大学教授、専修大学教授を歴任。主な著書『シュミット・カメラ』『望遠鏡』他、多数。

■書誌/ 中央公論科学雑誌『自然』1971年一年間連載+増筆。中央公論社『自然選書』昭和四十八年三月発刊。B5判/194頁